

幼少期の親子関係が青年期の愛着関係に及ぼす影響

-内的作業モデルの形成過程に着目して-

遊馬結

(立教大学大学院現代心理学研究科)

KEY WORDS: 青年期 愛着 内的作業モデル

(目的)

これまで、青年期の対人関係を考える上で多くの研究で重要視されてきたのが Bowlby (1969, 1973, 1980) の愛着理論である。彼によれば、子どもは愛着対象 (多くの場合は母親) との日々の具体的な相互作用を通して、徐々に、個人特有の心的ルール、すなわち内的作業モデル (internal working model: IWM) を形成する。乳児期・幼少期にこの IWM が形成されると、それを対人関係のテンプレートとして、その後様々な人との関係を形成する際に活用していくものと考えられている (Shaver & Hazan, 1988; 詫摩・戸田, 1988; 酒井, 2001)。発達障害のある人では、対人関係の形成困難にこの内的作業モデルの形成不全の問題が潜在するかもしれない。ところで、これまでの研究は、質問紙調査によって各時期の愛着を測定し、その関連性を示してきたものが多く、IWM 自体の形成過程や、それによる変容について直接観察や面接により捉えたものは少ない。そのため、本研究では面接調査を行い、幼少期の親子関係と青年期の愛着対象の具体的な共通項について検討する。そうすることによって、内的作業モデルの形成過程についての理解を深めることを目的とした。

(方法)

方法の選択：幼少期の愛着スタイルは青年期の恋愛関係にも影響することが知られているため、恋愛を検討場面とした。複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model; TEM) (安田・サトウ 2012) を用いた。この方法では、数回の面接を通して協力者と研究者が協働して TEM 図を作る。TEM 図には、協力者の行動や選択、そこからどのような状態に辿り着いたのか (等至点) という人生の経緯が描かれる。本研究では等至点を「現在の恋人関係における愛着タイプ」とし、幼少期の親子関係から現在の恋人関係に至るまでの愛着関係形成の過程を TEM 図に表した。

面接協力者：研究目的について説明し、協力は自由意志であることを確認した上で同意を得られた 20 歳から 22 歳の大学生 3 名 (男 1, 女 2) であった。

手続き：1 人あたり 2 回 (1 回あたり 30 分から 60 分) の面接を行い、1 回目の面接では、あらかじめ用意しておいた質問項目をもとに、主に幼少期の親子関係と現在の恋人関係について尋ねた。2 回目の面接では、1 回目の面接データをもとに協力者が作成した TEM 図を見ながら、追加的な質問をした。

分析方法：まず、面接の録音データから作成した逐語録をもとに、愛着関係に関するエピソードやそれに対する認知、感情などを抽出し、カード化した。次にそれらを時系列ごとに並べ、それぞれ岐点・必須通過点・等至点・両極化した等至点・社会的方向付け・社会的ガイドを定め TEM 図を作成した。

(結果)

本調査においては、幼少期の親子関係が安定していた者は現在の恋人関係も安定しており、これは仮説を支持する結果である。また、愛着対象が母親から恋人に移行していく過程をみる事ができた。さらに、幼少期の母親との関係だけでなく、幼少期から青年期にかけての父親・きょうだい・友人

との関係も恋人関係に影響を及ぼす可能性が示唆された。その影響の方向は多様であり、本研究における事例では、過去の父親や友人との不安定な関係を否定的に捉え、逆の方略をとることで安定した恋人関係を築いているケースもあった。また、親子関係と恋人関係の具体的な共通項については明らかにすることができず、内的作業モデルの形成過程を理解するためには、無意識の側面にアプローチする必要性や、記憶の再構成の問題があることがわかった。典型例として協力者 A の TEM 図を図 1 に示す。

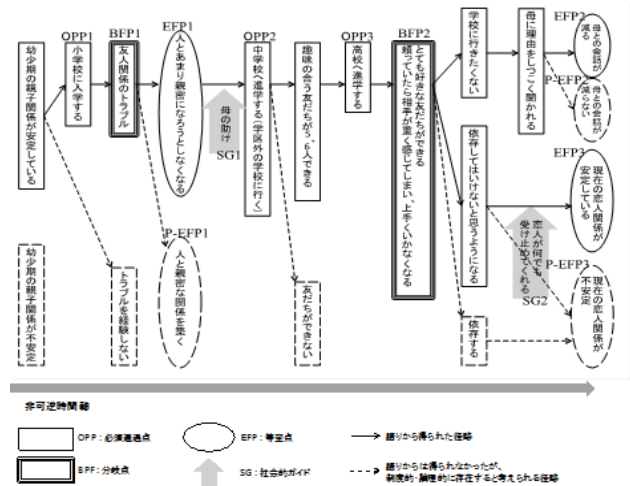


図 1 協力者 A の愛着関係形成の過程

(考察)

本研究の結果から、青年期に安定した愛着関係を築くためには、幼少期の母子関係だけでなく、幼少期から青年期にかけての父親・きょうだい・友人との関係も恋人関係に影響を及ぼす可能性が示唆された。これらの関係が愛着関係であるか否かに関しては、今後も検討の余地がある。しかしながら、青年期に安定した愛着関係を築くためには、幼少期の母子関係だけでなく、それ以降の様々な対人関係が重要な役割を果たしているということが考えられる。また、本研究における課題は以下の 2 点である。まず、分析の対象とした期間が長すぎたため、協力者の愛着関係に関する経験を網羅できていないことである。本研究では、幼少期から青年期までの愛着関係形成の過程を 1 つの TEM 図にまとめている。そうすることで全体像を掴みやすくなることができたが、今後は「恋人と愛着関係が築かれるまで」など、対象とする期間や相手を限定し、より詳細な語りを引き出す必要があると考える。次に、幼少期の親子関係に関する語りが十分に得られなかったことが挙げられる。協力者は、幼少期の具体的なエピソードについてはほとんど覚えておらず、答えることができなかった。また、後に親などから聞いた幼少期のエピソードを自分の直接体験と錯覚している可能性もあり、協力者自身の当時の体験や感情を的確に捉えることは難しい。そのため、内的作業モデルの形成過程に関する今後の研究においては、質問紙や面接、母子画などの多方面から得られたデータを総合的に分析し、慎重に考察していく必要がある。

(Yui Asuma)